

1 研究の概要

(1) 研究主題

「主体的な学びで共に高まりあう児童の育成」

～かかわることで自らの学びを自覚させる国語科の授業づくりを通して～

<主題設定の理由>

学校は、子どもたちの豊かな人格を形成していくとともに、社会の一員として必要な資質を養う場である。また、変化が激しいこれからの社会において、課題を発見し、解決へ向かって計画を立て試行錯誤しながらも主体的・協働的に対応することが求められている。次代を担う子どもたちにとって、社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい社会づくりを目指していきながら自立的に生きるために必要な力をつけなければならない。

本校においても教育活動を進めるにあたり、子どもたちにこうした「生きてはたらく力」を育むことを目指し、基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を構築していく資質・能力の育成を重視していく。学習や日常生活においても、経験や学んできたことを活用して、課題を解決していく力をつけていくとともに、他者と協働しながら学習に積極的にかかわり、自らのこととして本気で学んでいく態度を養っていかなければならない。そして、自ら課題を見付け、自ら考え主体的に判断し、よりよく問題を解決する力を身につける協働的な学習活動を展開していく必要がある。

本校は、全校児童255名、各学年2クラス編成の12学級・特別支援学級2学級の14学級という学級編成の中、落ち着いた雰囲気で行々の学習や生活を送っている。これまでの研究が礎になり、学年が上がるにつれ様々な場面において、自分で判断し、適正な行動をとる児童が増えている。しかし、主体性、創造性といった点からみると集会等での声の大きさ、授業の中で活動する児童のかかわりあいの姿において、弱さがあるのは否めない。

本校では、平成21年から国語科を中心に研究を進めている。平成25年度からの「教育課程拠点校指定事業」を受けての研究の柱は、

- (1) 教育課程を踏まえた学校経営計画や教科等の経営計画作成と実施
- (2) 組織的な教科経営を実践するための校内研修の実施
- (3) 授業力の向上を目指した組織的なOJTの実施
- (4) 言語活動を重視した授業づくりの実践
- (5) 主体的に学ぶ児童の育成を図る授業の工夫

と設定した。その方針を継続し、今年度は国語科に軸足を置きながらも、他教科への拡充を考慮し、「教育課程拠点校事業」の1年目としての研究を推進していく。

昨年度の授業実践を通して、研究の取り組みに力を入れたい課題は以下の5点である。

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">①「話す・聞く」領域の研究②授業における具体的な支援・指導方法③他教科への活用④予習型の家庭学習と授業のリンク⑤研究授業・公開授業の時期と回数、研究協議のあり方 |
|--|

国語科での実践から児童の姿を見たとき、何をどのように読めばよいか、その方法を学んだことで、学習に対する意欲の向上が見られた。本校が継続して取り組んできた「言語活動

の質的向上」を基盤とした教育活動の取り組みは、具体的な姿として「国語の学習が好き」と回答（学習評価の質問紙等）した児童が8割以上になり、一定の効果が得られたと考える。加えて図書館を活用する児童も増え、読書量も増加していることも成果のひとつである。

今年度も、これまでの研究内容を継承しつつ、これに変革を加えながら取り組んでいく。

新しい学習指導要領を踏まえて、国語科を中心に、「知識・技能の習得とそれらを活用する力（思考力・判断力・表現力）等の育成」につながる授業が必要であることはもちろんのこと、今後必要とされている力は学びに向かう力として、どのように学ぶかを主体的・協働的に考え、実践していく力である。すなわち、「児童が主体的に学ぶ授業」を実施することは、各教科全般の授業を高める指針になる。

国語科の4領域において、言語活動の質を向上させ、かかわることで自らの学びを自覚させる国語科の授業づくりを実現するために、付けたい力を明確にした単元構想をもとに、本校の「授業スタンダード」を意識した授業の改善と向上を図っていく。そして目指すところは、国語科でつけた力を他教科へも反映し、自ら課題を見つけ、解決の方向性を決め、計画を立て、実行し、解決につなげていけるような児童の姿である。

さらにここで言う、児童の言語活動が充実した姿とは、

- ・伝えたいことが相手に分かるように話す
- ・自らの考えを深化・拡充するために目的を持って聴く
- ・文章を読み味わう
- ・自分の考えや思いを豊かに書く

というような児童の姿である。よりよいものへ向かうためには、児童の自覚化が必要不可欠である。児童の「自覚化」については、「児童自身が不備・不足の把握ができること」、「今、何をしなくてはならないのか必要なことの把握ができること」、「現段階で自分のできていることの把握ができること」、これらをもとに学習活動に見通しをもつことが必要である。そのためには、教師が、これから何に向かうのか、ゴールはどこなのか、課題を明確化し児童に提示していかなければならない。学習を深めるためには、自らの学習活動を振り返り次へつなげるプロセスが必要である。振り返りの際に自分といかに向き合っていくか、その向き合い方を明確にし、よりよいものを自分で、或いは友だちと協働的な学びで構築していくことができるよう取組を進めていく。この協働的な学びの方法の一つとして「かかわりあう授業」の研究を進めていく。そして、獲得した力を精いっぱい使い、自らの考えや思いを表現しようとかかわりあう子どもの姿で検証していくようにする。

<研究仮説>

国語科の「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」の学習において、次のような手立てや指導の工夫を行うことにより、自分の思いや考えを生かし課題に対して主体的に活動し、友だちと共に意欲的に学ぶ児童を育成することができるであろう。

- ①学習のゴールからの逆向きの単元構想を作成し、付けたい力にそくしてねらいに迫る授業展開にする。
- ②かかわりあうことでよりよいものへ向かう児童の自覚化を促し、児童が自ら思考したくなるように発問（課題設定）や学習内容を工夫する。
- ③既習事項を使って、児童自らが課題を追究し、解決していく活動を位置付ける。
- ④授業と家庭学習とのサイクル化、つながりを持たせた学習活動を意図的に仕組む。

<研究内容>

(1) かかわることで自らの学びを自覚させる国語科の授業づくり

- ・単元の目標を達成するために効果的な言語活動の選定を行う。
- ・単元を貫く言語活動の明確な位置付けを行う。（単元構想図の作成）
- ・単元構想図を作成し、ねらい（付けたい力）を明確にした言語活動の充実を図る。

- ・授業の中に「かかわりあいの場」を意図的に設定し、必要感を持たせてかかわらせる。
 - ・読書活動を充実させる。(並行読書等)
- (2) これまでの「読むこと」、「書くこと」の領域に加え、新たに「話すこと・聞くこと」の領域において、児童がかかわりあうような指導を、学年の発達段階に応じて行う。
- ・「既習を活用できる読み・書きの力」「論理的に読む・書く力」を育む授業へと転換する。
 - ・マトリックス表を活用し、系統的に積み上げるべき力に焦点を絞って単元を構成する。
- (3) 基礎・基本の定着を図る指導の徹底
- ・国語科を中心に全教育活動において、子どもたちに
 - 論理的に意見を述べる能力
 - 目的や場面に応じて適切に表現する力
 - 目的に応じて的確に読み取る力
 - 読書に親しむ態度
 を調和的に育てることを重視する。
 - ・帯タイムである「ひかりタイム」を充実させ、漢字の習熟やことばの力、書く力を養う。
- (4) 家庭学習と授業のサイクル化、連携を図る。
- ・授業とリンクした家庭学習の内容を工夫することで、児童の意欲喚起と学習内容の定着を図る。
 - ・単元でつけた力を家庭学習で試す。

<研究方法>

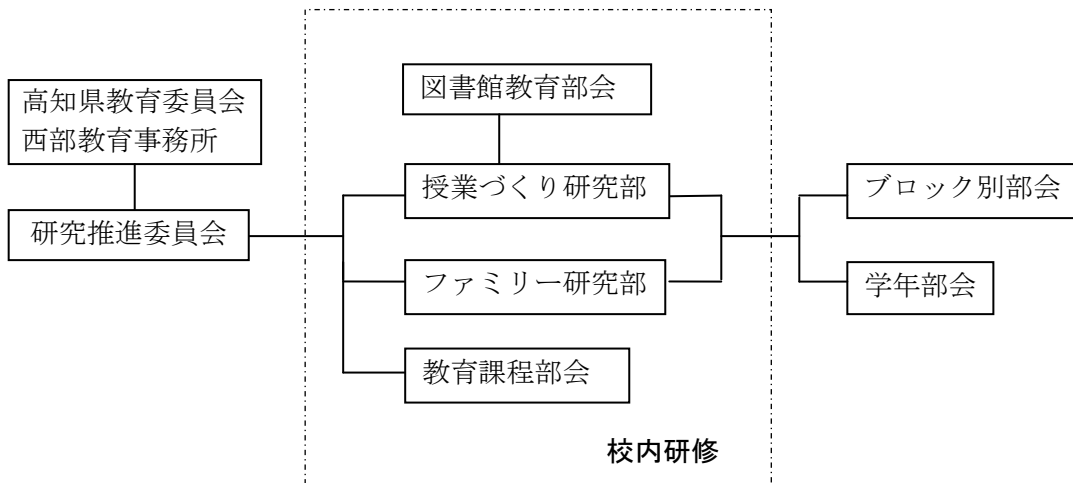
(1) 研究部会の充実

- 大きく「授業づくり研究部」および「ファミリー研究部」において研究を進めながら、適宜、「図書館教育部会」、「教育課程部会」を実施し、総合的に研究を推進する。
- 学年部会、低学年・中学年・高学年のブロックを中心に授業における実践を持ち寄り、検証や研究テーマに沿った教材研究、指導案検討、授業研究後の検討を行う。
- 学年部会やブロックでの研究に、7年部も参加する。

(2) 授業研究

- 一人年間2回公開授業→単元構想図をもとに、研究テーマに沿って教材を研究、指導案を作成。
 - ・授業研究の事前・事後の協議を重視する。
 - ・課題を明確にし、授業改善を図って、次時につなげる。
- 教育課程拠点校事業研究発表会当日は、各学年代表が提案授業を行う。(11月2日)

<研究組織>



<研究の構想図>

学校教育目標 「豊かに学び、共に生きる喜びをもつ児童の育成」
～やさしく かしく たくましく～

<研究主題> 主体的な学びで共に高まりあう児童の育成
～かかわることで自らの学びを自覚させる国語科の授業づくりを通して～

研究仮説

単元の中で、言語活動を一連の学習過程として一貫して位置付ける。

単元づくりの4つのステップに基づく
単元構想の作成

思考させる発問・学習内容の工夫

児童自らが課題を解決していく活動

家庭学習と授業のサイクル化・連携

<具体的な取り組み>

- ・マトリックス表の活用
- ・授業づくりのスタンダード
- ・並行読書

他教科への広がり

自らの学習活動を振り返って学びを自覚し、よりよいものを自己や友だちとの協働的な学びで主体的に構築していく児童の育成につながる。

<授業における方策>

- ◆めあて・課題を示し、自力解決させる
- ◆思考させる発問の工夫
- ◆児童がかかわり合う場面の設定
- ◆表現する活動を取り入れる

- ・家庭学習の習慣化
(学年×15分)
(学校評価アンケート)
- ・ノート指導の充実
(学習や思考の流れがわかるノート)
(自分に力が付いているのか振り返りにも活用)

- ・各学年の指導事項の系統化
(物語、説明文の読みの観点)
(児童が追究し、関わり合う授業)
- ・OJTによる指導力向上
(専科教員の提案授業・研究授業、公開授業)

組 織 的 な O J T

<具体的な取り組み事項>

- (1) 教育課程を踏まえた学校経営計画、国語科の教科経営案の作成
 - 学校経営計画、年間指導計画の見直し
 - 国語科の教科経営案の作成
 - 年間指導計画をもとに、各学年においてマトリックス表の見直し

- (2) 組織的な教科経営を実践するための校内研修の実施
 - 研究推進委員会の設置と計画的な実施（毎週月曜日）
 - 校内研修年間計画の確実な実施
 - 外部講師の招聘
 - 校内研修に関わるアンケートを年2回実施し、研究の方向性を確認していく。

- (3) 授業力の向上を目指した組織的なOJTの実施
 - 公開授業や研究授業を実施し、評価やアドバイスを受けることで、授業の課題を明確にし、授業改善につなげる。
 - 帯タイムを充実させ、全校をあげて基礎基本の学力を付ける取組を徹底させる。
 - 全校授業研やブロック授業研に向けた教材研究の中で、系統性を意識した単元計画を立てる。
 - 授業研後には、ねらいに沿った授業だったのか児童の姿を中心にすえ、そのための視点を明確にして研究協議を行い、明らかになった成果と課題を次の授業に生かす。

（研究通信の発行）
 - 国語専科教員と指導法工夫改善教員が、年度当初に方針に掲げている項目について意識した提案授業を行い、全教職員の共通理解を図る。

（専科教員は専科通信の発行）

- (4) 授業改善を目指した、かかわりあう授業づくりの実践
 - 「単元構想シート」を活用し、単元で付けたい力を明確にしながらか単元構想を練る。
 - 物語文および説明文の読み方や書く活動において児童が主体的に学ぶ授業を創造する。
 - マトリックス表をもとに、単元で取り上げる指導事項を精選し、付けたい力およびゴールイメージを明確にして授業を実施する。その際、単元全体の学習の流れや単元構想を明確に持ち、単元の入り口と出口を児童に示すことで、児童が見通しや目的意識を持って活動できるようにする。
 - 児童にとって読む必然性のある展開、日常で機能する力をつける授業づくりを行う。
 - 単元構成において、第三次に行う言語活動を遂行するための各パーツとなる能力を、第二次でつけるための学習過程について、研究協議等を通し具体的に明らかにしていく。
 - 思考を深め、考えを引き出す発問や課題の出し方について工夫・改善する。
 - 常に、理由や根拠をもとに自分の考えを表現し、お互いがかかわりあい、高まりあっていくことを大切に授業づくりをする。
 - 相手を意識して話し合いができる力を養い、授業の中で効果的に活用していく。
 - 振り返りを重視し、自分に力が付いているのかどうか、児童自身が自覚できる場面を設定し（自己認知力の育成）、変容を評価していく。

- (5) 国語科と他教科の連携を図る
 - 教育計画の整備に基づき、国語科を軸として他教科へ反映させる。
 - 総合的な学習と国語科をリンクさせた単元計画の作成（本年度は、4学年各1本ずつ）

- (6) 家庭学習と授業のサイクル化
 - 家庭学習を予習型にし、授業の中で意図的に指名、評価を行い児童の意欲化を図る。
 - 単元のゴールを受けての力試しの要素をもつ家庭学習を設定する。